



# GOOD NEWS ときのかえ

# War Cry

## 4月号

福音版  
2018  
April  
No.2765

二〇一八年 四月一日発行

明治二十八年創刊

福音版・毎月一日発行 広報版・奇数月十五日発行(除く七月)

# イースターおめでどう！

### 山谷 真

「死んだら人間、おしまいだ。おわりがあるから、人生だ。かぎりない命など、とてもじゃないが耐えられない。」

「死んだら人間、おしまいだ。おわりがあるから、人生だ。かぎりない命など、とてもじゃないが耐えられない。」

そう思っている方に、カラフルなゆでたまごを差し出して、「イースターおめでどう」と笑顔で勧めるクリスチャン！

「死んだら人間、おしまいだ。おわりがあるから、人生だ。かぎりない命など、とてもじゃないが耐えられない。」

これが、クリスマスに比べ、なかなかイースター

「死んだら人間、おしまいだ。おわりがあるから、人生だ。かぎりない命など、とてもじゃないが耐えられない。」



今年のイースターは、4月1日(日)です

ある必要がある。聖書は人間にそのことを伝えようとしているのです。

神様と人間とのあいだの心と心のつながりが、ふつ

つり切れたから、人間は永遠に生きるこの意味を失

い、死ぬようになりました。

死のはじまりを聖書は描

き、以来、死が世界をおお

つて今に至っているのは、

わたしたちの経験どおりで

す。

神様どころじゃない。人

と人とのあいだですら心と

心をつなぐのに失敗し続け

ています。

ぶつちようづらをしてい

るあの人や、この人と、お

わりのない世界に閉じ込め

られたら、と想像したら、

おそろしくてしかたありま

せん。

しかし、イエス・キリス

トはおっしゃいました。

「わたしは復活であり、

命である。わたしを信じ

る者は、死んでも生きる

生きていてわたしを信じ

る者はだれも、決して死

ぬことはない。このこと

を信じるか。」(ヨハネによ

る福音書11章25、26節)

イエス・キリストが示し

てくださった人生の秘訣は、

「赦す」ことです。

本気で相手を赦そうと覚

悟を決めて、心がぐらつい

ても、赦して、赦して、赦

し抜いたとき、心はうらみ

それが、イースターです。よみがえられたイエス様を目の前に見て、信じられず不思議がついている弟子たち(目で見なければ信じない、というの嘘です。目の前に見てたって実際は信じられないのです)イエス様はおっしゃいました。

「あなたがたに平和があるように」

「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」(ヨハネによる福音書20章19、23節)

イエスターのゆでたまごに塩をふってかじりながら、真剣に考えるべきことは、「わたしは誰を赦すべきだろうか」ということです。

神様は、イエス・キリストの十字架によって、あなたの罪をつぐない、赦してください。神です。

だから「あなたも赦しなさい」と神様はあなたに勧めておられます。

「よし、赦そう！」と心底思えたら、あなたはもう永遠の命を今、生きはじめています。

(救世軍士官(伝道者))

書かれたことで、また演奏されたことでその福音は伝えられ、かつ神に捧げられている、仕事は成されている……

# 音楽と私

松居 直美

松居 直美(まつい なおみ) パイプオルガン奏者  
国立音楽大学、同大学院修了。フライブルク音楽大学演奏家コース卒業。第2回日本オルガンコンクール、第21回アダベスト国際音楽コンクール等で優勝。帰国以来、リサイタル、国内外の主要オーケストラとの共演などの活動の一方、ヨーロッパ、アジアでも定期的に演奏している。平成13年度文化庁短期特別派遣員としてオランダで研修。録音にも積極的で、ソニー、カメラータ等から多くリリース。平成25年度文化庁芸術祭レコード部門優秀賞受賞。平成26年度下総院一音楽賞受賞。国際音楽コンクールの審査員にも定期的に招聘されている。所沢市民文化センター、ミュゼザ川崎シンフォニーホール・アドヴァイザー。聖徳大学音楽学部教授。一般社団法人日本オルガニスト協会会長。日本基督教団小金井教会オルガニスト。  
第2回救世軍チャリティーコンサート(2018年3月)に出演。



ルファベットの置き換え、A=1、B=2…と数字を当て嵌めた)で、バッハ自身の信仰の告白を意味する。

このようなことは、聴いている人にそのまま、作曲家の意図したこととしては伝わらない。複数の声部が入り組む曲で各声部の音の形を聴き取ることや、小節数を数えることは不可能である。しかし、彼らはそれを気にかけない。書かれたことで、また演奏されたことでその福音は伝えられ、かつ神に捧げられている、仕事は成されているからである。

このような音楽の在り方を体験したことは私にとって驚きであり、音楽への自分の関わり方を大きく変えた経験となった。曲をまったく新しい次元で見たり聴いたりすることになり、演奏する意味を得たと言っても過言ではない。演奏は、聴いてくださるお客様あつてのものではあるが、同時に目には見えないけれども聴いておられる方の存在があるなら、演奏する側にも聴く人にも何と豊かな、恵みに満ちた営みとなることであろうか。



まれた地に暮らしたのは貴重な経験となった。キリスト教社会に住むことで受け継がれている信仰を肌で感じたことはむしろだが、その音楽が生まれた土地の言葉をしゃべって生活したことは大きなことだった。なぜなら、音楽とは言葉だからである。歌詞を持つ音楽は言わずもがなだが、言葉の付いていない音楽も、音楽は言葉から生まれたからである。

そしてこの音楽の力を音楽家たちはよく知っていた。特にバロック時代、ルター派の音楽家たちは、「聴く」芸術である音楽が「み言葉を聴く」ことと同じであると考へたルターの考え方を受け、自分の

賜物のすべてを捧げて神の言葉を聴衆に伝えることを目指した。単に「感動的」な楽曲を書いたのではない。調性、拍子、モチーフの形、音の数など、曲を構成するあらゆるエレメントを駆使して、テキストの内容を表現する。バッハの受難のオルガンコラールのひとつを例に挙げるなら、内声の音の繋がりが十字架の形を描き、一番下のバス声部はタイ(音と音を結んで繋げる記号)によって音が繋がって残り、それを「掛かる suspend」と解釈し、「十字架に掛(架)かる」ことの象徴とした。曲の総小節数が11小節なら、それはユダガ裏切りによって去った後の弟子の数、すなわち罪の数を表す。14小節なら、バッハの数(BACHをア

私がオルガンと出会ったのは小学校6年の時だったと思う。両親が通っていた教会が設置したオルガンの披露演奏会であったと記憶している。初めて聴いたその音色は、今まで聴いたことのないもので、天から降ってくるような音の輝きに強く惹かれたものだ。これがきっかけでオルガンを弾くようになり、礼拝にも関わってゆくことになったが、そこに召命感があったわけではない。モチベーションはもっぱら好奇心と楽しみで、気に入っていたのは家にあったヘルムート・ヴァルヒヤの弾くバッハのレコードで、その輝かしく美しい古いオルガンの響きに魅力を感じていた。

この頃、もうひとつハマっていたのがオラトリオ(宗教オペラのこと)の合唱を歌うことである。オラトリオだけを歌う合唱団に入り、ヘンデルの「メサイヤ」、バッハの「マタイ受難曲」や「ヨハネ受難曲」などを歌い、その美しい響きと心を揺さぶる旋律の数々に熱中していた。今思えば、歌詞の世界を理解するにはまだ未熟であったが、音楽が心にストレートに入ってくる快さを知った経験だった。歌詞は解らなくとも内容は胸に響いていたということで、これがまさに音楽の力であろう。

それから専門に勉強する決心をして音楽大学の門を叩いた。その後留学をしてオルガンとその音楽が育

## わたしのあかし 証言 Testimony

# 赦してもらった……

黒田 勲

私は、高校時代大学受験に失敗したことをきっかけに、横道にそれて家出を繰り返して、最後には勘当されて、二十代は、本当にすきんだ生活でした。月給が酒代に消えてしまうような酒浸りの日々でもありました。家族から見放された私をたった一人伯母だけが心配してくれていました。純文学の作家だった伯母の弟子に救世軍の関係者がいて、伯母が彼女に私のことを相談したところ、「救世軍は人間改造所だから、行ったらいいい」と、二人で救世軍の本営(本部にあたる)に相談に行ったそうです。

対応してくれた方はすぐに私に手紙をくれ、救世軍の青年の集まりに誘ってくれました。しぶしぶ行ってみると、救世軍のホールに入った途端、あっ!と気付いたことがあったのです。二百人くらいの青年がいたでしょう。彼らがとても良い顔をしていたのです。私は「あんな人になりたいなあ」と思いました。ちょ

うど一年くらい前に不審尋問を受けて、警官にも伯母にも、「あなたの顔は人が振り返って見るくらい悪い顔してる」と言われてしまっていたからでした。集まりの最後の時に、手紙をくれた方が私のそばに来てお祈りしてくれました。そして、紹介された神田小队(教会にあたる)に翌週から通い始めました。それは、昭和四十一(一九六六)年、二十九歳のことでした。最初は、お話を聞いても意味は分かりませんでした。が、半年くらいして、「あなたの罪のためにイエス様は十字架で死んでくださいました。イエス様を信じなさい。そうしたらもう一度新しい人生に生まれかわることができる」という説教の言葉が、あたかも私個人に語りかけているように感じました。一人で恵の座(神様にお祈りをする場所)に出て祈りました。「神様、赦してください。私は大きな罪を犯しました。しかしあなたを信じます。

どうかお赦してください。」ほんの数秒の祈りでしたが、その夜、寝床に入って「ああ、自分は神様に赦してもらったんだ」と思いました。それまで誰も私を赦してくれなかった。肉親も親戚も世間も赦してくれなかったけれど、神様が赦してくれた。涙がとどろくように流れました。「真つ黒な人生だったけれど、新しい人生をもらった」と。一晩中泣き、枕がびしょりになったのを覚えています。それが私の生まれかわりでした。それ以来「ああ、神様が共にいてくださる」といつも心に喜びがありました。当時、電気関係の仕事をしていたのですが、だんだん(かつての私のように)底辺で苦しむ人にこの喜びを伝えたいと思うようになりました。すると、そのころ計画されていた、メンソーシャル(男子社会奉仕センター)という、アルコール依存症者のリハビリのための働きに誘われました。本当は救世軍の士官(伝道者)になりたかったのですが、自分にはできないと思い、昭和四十四(一九六九)年、その働きに就きました。

月島にあった救世軍の宿泊施設裏に、米軍から貰った、かまぼこ型のプレハブの材料を使って、文字通り働きを「立ち上げ」しました。アルコールの問題に取り組むのは、日本では先駆的なことで、最初の対象者は二人でした。私はまかないもし、すでに始まっていた、杉並の救世軍施設の庭で開いていた不定期の市(リサイクルバザー)と不用品の回収が、「作業所」となりました。ある著名な方が、「私は、古くなってまだ使えるものは、救世軍に寄付します」と新聞に書いてくださり、大きな反響がありました。やがて、現在のバザー場へと発展していき、ました。当時、年末年始に、メンソーシャルの人たちと越冬対策としての街頭生活者支援もしていました。

そのうち、救世軍の士官になりました。献身は、本当に「神様が」導いてくださったと思えます。神様はちゃんと伏線を敷いてくださっていて、底辺の人々、苦しみ悲しむ人々を手伝う働きを士官の生涯を通して今まで続けることができました。アルコール依存症の人々の立ち直りの効果は、周りの人を動かしていきました。

私は、高校時代大学受験に失敗したことをきっかけに、横道にそれて家出を繰り返して、最後には勘当されて、二十代は、本当にすきんだ生活でした。月給が酒代に消えてしまうような酒浸りの日々でもありました。家族から見放された私をたった一人伯母だけが心配してくれていました。純文学の作家だった伯母の弟子に救世軍の関係者がいて、伯母が彼女に私のことを相談したところ、「救世軍は人間改造所だから、行ったらいいい」と、二人で救世軍の本営(本部にあたる)に相談に行ったそうです。

対応してくれた方はすぐに私に手紙をくれ、救世軍の青年の集まりに誘ってくれました。しぶしぶ行ってみると、救世軍のホールに入った途端、あっ!と気付いたことがあったのです。二百人くらいの青年がいたでしょう。彼らがとても良い顔をしていたのです。私は「あんな人になりたいなあ」と思いました。ちょ

うど一年くらい前に不審尋問を受けて、警官にも伯母にも、「あなたの顔は人が振り返って見るくらい悪い顔してる」と言われてしまっていたからでした。集まりの最後の時に、手紙をくれた方が私のそばに来てお祈りしてくれました。そして、紹介された神田小队(教会にあたる)に翌週から通い始めました。それは、昭和四十一(一九六六)年、二十九歳のことでした。最初は、お話を聞いても意味は分かりませんでした。が、半年くらいして、「あなたの罪のためにイエス様は十字架で死んでくださいました。イエス様を信じなさい。そうしたらもう一度新しい人生に生まれかわることができる」という説教の言葉が、あたかも私個人に語りかけているように感じました。一人で恵の座(神様にお祈りをする場所)に出て祈りました。「神様、赦してください。私は大きな罪を犯しました。しかしあなたを信じます。

どうかお赦してください。」ほんの数秒の祈りでしたが、その夜、寝床に入って「ああ、自分は神様に赦してもらったんだ」と思いました。それまで誰も私を赦してくれなかった。肉親も親戚も世間も赦してくれなかったけれど、神様が赦してくれた。涙がとどろくように流れました。「真つ黒な人生だったけれど、新しい人生をもらった」と。一晩中泣き、枕がびしょりになったのを覚えています。それが私の生まれかわりでした。それ以来「ああ、神様が共にいてくださる」といつも心に喜びがありました。当時、電気関係の仕事をしていたのですが、だんだん(かつての私のように)底辺で苦しむ人にこの喜びを伝えたいと思うようになりました。すると、そのころ計画されていた、メンソーシャル(男子社会奉仕センター)という、アルコール依存症者のリハビリのための働きに誘われました。本当は救世軍の士官(伝道者)になりたかったのですが、自分にはできないと思い、昭和四十四(一九六九)年、その働きに就きました。

月島にあった救世軍の宿泊施設裏に、米軍から貰った、かまぼこ型のプレハブの材料を使って、文字通り働きを「立ち上げ」しました。アルコールの問題に取り組むのは、日本では先駆的なことで、最初の対象者は二人でした。私はまかないもし、すでに始まっていた、杉並の救世軍施設の庭で開いていた不定期の市(リサイクルバザー)と不用品の回収が、「作業所」となりました。ある著名な方が、「私は、古くなってまだ使えるものは、救世軍に寄付します」と新聞に書いてくださり、大きな反響がありました。やがて、現在のバザー場へと発展していき、ました。当時、年末年始に、メンソーシャルの人たちと越冬対策としての街頭生活者支援もしていました。

そのうち、救世軍の士官になりました。献身は、本当に「神様が」導いてくださったと思えます。神様はちゃんと伏線を敷いてくださっていて、底辺の人々、苦しみ悲しむ人々を手伝う働きを士官の生涯を通して今まで続けることができました。アルコール依存症の人々の立ち直りの効果は、周りの人を動かしていきました。

この部分を封書か葉書に貼り、裏面の救世軍にお送りください。

-----  
キトリ  
-----  
□□私の近くの救世軍を紹介してください。  
□□キリスト教についてもつと知りたいです。  
□『ときのことえ』の購読を申し込みます。  
-----  
ご氏名  
ご住所  
-----

創立者 ウイリアム・ブース 大将 アンドレ・コックス (万国本営 英国ロンドン)



世界をみつめて

〈日本〉東京地区の冬期街頭給食

東京地区では、年末の社会鍋でお預かりした献金によって、1月、2月に都内の3箇所街頭生活者への配食支援をおこないました。

週3回、救世軍の小隊(教会にあたる)や、社会福祉施設、病院関係者はもとより、外部からのボランティアによって、温かいお弁当を準備。夜に各地へ出向いて、街頭生活を余儀なくされている方へ声をかけながら温かさの保たれたお弁当をお渡ししました。



〈 Bangladesh 〉地すべりの被災地を支援

毎年、大雨による被害を受けている Bangladesh。昨年6月以来の豪雨は各地に大きな被害をもたらし、死者は300人以上に上りました。

2018年2月、東側のインドとの国境にある少数山岳民族居住地域の町ランガーマーティの人々に、安全かつ丈夫な住居を提供しました。特に自治体の協力を得て、年少児童、高齢者、障がい者のいる150の家庭を対象としました。「新しい家がもらえるなんて信じられない!」と喜びの声があがっています。



〈アメリカ〉街頭生活者支援のために、50万ドル(約5千万円)の献金

カリフォルニアのサンディエゴは、アメリカ国内でも4番目に街頭生活者の多い地域です。救世軍では毎年、26万7千人の街頭生活者を支援しています。

このたび、地元の資産家であるアーネスト・ラディ夫妻より、街頭生活者のために、とアメリカの救世軍史上2番目となる多額の献金が託されました。

救世軍では、今回の献金に加え、さらにキャンペーンをおこなって献金を募り、様々な困難を抱えて街頭生活をしている人々のための宿泊施設を設置する計画を進めています。

救世軍酒害強調週間  
4月1日~7日

アルコール依存症の人々への支援施設

●自省館(救護施設)  
生活の場を提供し、回復のために、個別支援計画に基づく生活及び自立支援をおこなっています。

TEL 042-493-5374

●男子社会奉仕センター  
バザー場での作業を通して、身体的・精神的回復を図り、社会復帰できるよう支援しています。

TEL 03-5860-2992

●救世軍バザー場  
TEL 03-5860-2992

東京都杉並区和田2-21-2  
中野富士見町駅(東京メトロ丸の内線)  
下車徒歩10分

オープン 毎週土曜 9時~13時半

●江東出張所  
TEL 03-6261-5704

東京都墨田区太平4-11-3  
錦糸町駅(東京メトロ半蔵門線、JR)  
下車徒歩10分

オープン 毎週土曜 10時~15時



救世軍とは? What is the Salvation Army?

心は神に 手は人に Heart to God, Hand to Man

救世軍は、イギリスに国際本部(写真右)があり、世界128の国と地域で活動する、プロテスタントのキリスト教会です。

1865年、イギリスのメソジスト教会の牧師だったウイリアム・ブースによって始められ、貧しい人々、家のない人々、仕事に就けない人々、アルコールにおぼれる人々、搾取される女性たち、顧みられない子どもたち、災害に遭った人々...などに助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。



日本での働きは、1895(明治28)年に始まりました。伝道の拠点である小隊(教会にあたる)を開設し、廃娼運動を積極的におこない、失業者対策、児童養護や女性保護、結核療養所の設立、アルコール依存症者回復支援など、時代にさきがけて、人々の必要に応える様々な働きを興してきました。

これらの働きの中でも、アルコール依存症者の回復支援は、救世軍がその草創期から取り組んできたものです。酒のために自分の人生ばかりか家族の生活をも狂わせてしまう、そのような状態からの脱出の道を提供する団体として、信徒たちは率先して酒類を摂らない生活を送っています。

日本では、『禁酒のすすめ』の本、講演会などで酒の害を説き、毎年4月には酒害強調週間を設けて、アルコール問題に対する啓発に努めています。

〔取扱支部〕

救世軍は、統一協会、エホリマセン、モルモン教ではお話しできません。これらの問題はお話しできません。右救世軍にご相談ください。

発行日及び定価

▼発行日  
福音版・毎月一日発行

広報版・奇数月十五日発行(除く七月)

▼定価

福音版・一部 四〇〇円

広報版・一部 一〇〇円

クリスマス特集号(十一月一日号) 一部 一〇〇円

振替・〇〇一八〇五四〇〇

発行兼 救世軍

印刷人 代表者ケネス・メイナ

編集人 寺澤 真由子

〒101-0051 東京都千代田区

電話 東京(03)三三七〇八八一

発行所 救世軍本営

印刷所 図書印刷株式会社